

北齊徐穎（徐顛秀）墓壁画の造形的特徴

—北朝人物画様式の一典型—

河野道房（大阪府立大学）

唐の張彦遠撰『歴代名画記』を参照すれば、北齊は魏晉南北朝時代の北朝の中では最も絵画制作が盛んであり、優れた画家を多く輩出した時代であったことがわかる。北齊を代表する画家のひとり楊子華は、初唐の巨匠閻立本に大きな影響を与えたとされているが、もちろん両者とも現存作品はなく、閻立本については《帝王図巻》（ボストン美術館）の一部にその面影をしのぶことができるにすぎない。ところが1980年代から急増した魏晉南北朝時代の墳墓壁画の発掘から、南北朝、特に北齊時代の高品質の壁画が発見され、これまで具体的イメージがつかみにくかった北朝絵画が次第に明らかになってきた。特に1979年から81年にかけて発掘された山西省太原市の婁叡墓壁画は、種々の記録から楊子華に極めて近い画家の優れた作品と考えられ、北朝絵画は、考古学的遺品の域を超えて作品を踏まえた美術史的考察が可能になってきたのである。

本発表は、2000年から2002年にかけて太原市で発掘された、北齊の徐穎（字は顛秀）の墳墓壁画を中心に考察し、婁叡墓壁画やそれに引き続く墓室壁画とあわせて、初唐画壇に直接すると思われる北齊絵画の特徴を抽出しようとするものである。

徐穎は、文宣帝（高洋）の母方の従兄弟であった北齊外戚の婁叡とは異なり、正史には零細な記事しか現れないが、発掘された墓誌銘から、鮮卑系の出自で婁叡と同じように武勳を立てて武安王に封じられ、婁叡の死の翌年、武平2年（571）に晋陽（山西省太原市）で死去したことがわかる。北齊建国の功臣のひとりであったらしく、婁叡墓とはほぼ同規模の大きさや構造の墓室・墓道を持つ一方、壁画は、婁叡墓が剥落や傷みが多かったのと対照的に保存状態がよく、墓道・墓室内四面のほぼ全体が遺されている。

ここで注目されるのは壁画の主題と様式である。墓道壁画は儀仗図、墓室壁画は端座する墓主夫妻に牛車・兵馬図、という北齊墓室壁画に共通する主題であるが、人物の造形を見てみると、下ぶくれ気味の瓜実顔、濃いへの字形眉、つり上がった切れ長の眼、唇の厚いおちょぼ口といった特徴的な顔貌表現であり、筒袖の胡服に革ベルト、長靴、秀でた額に布を背中まで垂らした冠をかぶることなど、鮮卑人の婁叡墓との類似性が顕著である。これが同じ鮮卑系北齊墓でも、首都鄴都（河北省邯鄲市磁県）で発掘された茹茹公主墓や文宣帝に比定される湾漳北齊墓の壁画とは顔貌表現が微妙に異なり、褒衣大袍の人物が多い南朝系の崔芬墓（山東省）とは大きく異なるが、同じ鮮卑系の北周李賢墓（寧夏自治区）の生硬な画風とも違っている。これらの画風の特徴から、南北朝時代には、鮮卑系では太原（晋陽）様式と磁県（鄴都）様式の二系統および北周様式、南朝系様式およびその影響下にあった北魏系の「秀骨清像」画風等が混在していたことがわかり、初唐絵画には南朝・北魏系よりもむしろ鮮卑系様式の影響の方が大きかったと推定されるのである。

人物画風の問題以外にも、興味深いモチーフとして雷神やいわゆる「畏獣」（烏獲ともいわれる）の表現に特徴があり、これら諸問題を2008年に発掘され最近紹介された山西省朔州水泉梁の北齊墓壁画（『文物』2010年12月号）も視野に入れて考察したい。